View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

# 欧米と日本の英語教育・方法論史における
# 神戸女学院の英語教育・教授法の流れ (II)

原　田　園　子

Summary

## English Language Teaching at Kobe College: A Historical Review in the Light of English Teaching in Japan and Foreign Language Teaching in Europe and America (II)

Sonoko Harada

This is the second part of the series of papers on English language teaching at Kobe College historically reviewed and discussed in the light of ELT in Japan and FLT in the West. This chapter deals with the theory and the "scientific" method developed during the twenty years at the beginning of the twentieth century in Europe in the first section, and the introduction of this methodology, the advocacy of its application, and the trend toward improvements in English teaching at secondary schools in Japan in the second section. In the third section, the curriculums of English as a school subject, in the academy department, the college(-level) department, and the supplementary course, which were revised repeatedly with the changes in school organization at Kobe College during the twenty years, are described and explained together with a discussion on the level and the content of English teaching/learning.

# 第2章：1901年～1920年

## 序

20世紀に入って，欧米の外国語教育分野では改革期に論じられた理論に基づく教授法の実践と普及がますます盛んに唱えられるようになった。こういった動きのなかで，デンマークのJespersen，アメリカのBloomfield，イギリスのPalmerの提唱が代表的なものとしてあげられる。一方，日本でも前世紀末より始まった英語教育改善を目指す教授法の研究が盛んになり，雑誌『英語教授』の発刊，欧米の研究の成果や学習・教授法論の紹介，日本人による改善案や教授法の発表，英語教員大会等があり，このような動向が，1922年の文部省によるPalmer招聘の下地になっていったのであった。神戸女学院においては，学科組織の改正が引き続き度々行われ，英語教師陣と教育内容の充実がはかられ，高等科が大学部へと発展し，更に英語教員養成も組織的にとりくまれるようになった。これに貢献し，神戸女学院の，特に入門期・初級の英語教育の基を築くことになったのが1910年に着任したMary Stowe女史であった。

本稿では日本に約15年間滞在し科学的な英語教授法を普及せんと活躍することになるPalmerの来日直前の1920年までを扱う。今回扱う範囲の概略を年表にしたのが付表Aである。

## 第1節：欧米における新・語学教育方法論

19世紀後半から芽生えた外国語教育改善の動きが一方では各種の一言語使用法を生み出し，他方では世紀末から20世紀初頭にかけての応用言語学的方法論を説く改革運動となっていた。続く今世紀前四半期は，これが発展し，外国語教授法の研究が進み，外国語としての英語教育の分野が確立される基が築かれる時期となった。

1904年に，現在，近代的外国語教授法の古典とされている，Jespersen の *Sprogundervising*（1901）が *How to Teach a Foreign Language* と題して英訳された。フランス語，英語，ラテン語を学んだ Otto Jespersen（1860 — 1943）は早くからフランスにおける改革運動に関心があり，1886年に発音学教師の会に入会し，その翌年ロンドンを訪れた際 Henry Sweet[1] に会い影響を受けた。1888年ドイツで Viëtor[2] と接し，更にフランスで Passy[3] の講義を聞いた後，コペンハーゲンに戻りしばらく中等学校で英語とフランス語を教えていた。その後1893年にコペンハーゲン大学の教授となり，外国語教授の研究者，さらに英文法の研究者となったのであった。

彼の *How to Teach a Foreign Language* は，文法と翻訳を中心とする教授法の欠点を述べ，音声の習得に重きをおく方法論を説くものである。彼は，語学学習とは，その言語を母国語とする人々の言語力に出来るだけ近いそれを習得することを目標とするもので，学習用のテキストは学習者にとって興味深く，伝達行為をするのに最も必要な言語材料を盛り込んだ，生きたものでなくてはならないとしている。翻訳の必要性を主張する教師達に対し，訳読にはそれなりの原文の意味の理解の確認という役割はあるとしながらも，絵や実物等を中間媒介とすることや，文脈から意味・解釈をさせる方法を示唆している。また，文法学習については，子供が母国語を無意識のうちに習得していくのにならい，類推によって学習者が自ら文法を作り上げていく帰納法を説いている。発音については，学習初期の正しい発音習得はその後の語学学習を促進することになるので大変重要であるとし，そのためには発音記号を使って指導することも説いている。学習者は読んだり翻訳をするだけでなく，目標言語を使って話すことや書くことの様々なドリルをしながら，つまり実際に伝達行為をしながら，学習していかなければならないとしている。このような意味・内容の伴った伝達をしていく学習法では，学習者は生きた言葉を使って学ぶことになるので，学習に興味を持ち，学習が持続されるのであると主張している。

改革期の主張する科学的な言語音声の研究者であり，1906年にロンドン大学主催による発音学の一連の公開講演活動を開始した Daniel Jones（1881 — 1967）が語学教育の新教授法に初めて接したのは，1898年にロンドンの Gouin Method[4] による学校でフランス語を学んだ時であった。さらに1900年に改革運動の提唱する Reform Method によってドイツ語を学んだ際に Viëtor の Phonetic Method を知り，1905年〜1906年に Passy よりこれを学んだのであった。

Jones の1909年出版の *The Pronunciation of English* は，教育を受けた人やイギリス南部の人々の発音，さらに，ロンドンで使われる英語の発音を，学校教師や教員養成学校の学生に教えるために書き表されたものであるが，Jonesは母国語としての英語の発音の知識は外国語

の正しい発音の習得の基礎となるべきものでもある，とこの書の目指すところを述べている。彼の *An English Pronouncing Dictionary*（1917）は，Received Pronunciation と呼ばれるこの発音を，言語上実用に即すように記録する目的で著されたものであり，一般の用をなすためと同時にこれを話さない英国人と外国人英語学習者のために役立つように書かれたものである。1918年の *An Outline of English Phonetics* は，音声学の知識は正しい発音を真似て習得する助けとなるものであるという考えに基づき書かれたもので，Received Pronunciation が示され，外国人によく見られる英語の発音の誤りが音声学的に解説されている。また，正しい発音の習得には聴き取りの練習[5]も必要である等の発音習得の方法論も序で述べられている。

1914年出版の *An Introduction to the Study of Language* は，後に *Language*（1933）によってアメリカ言語学の構造主義の祖と言われるようになった Leonard Bloomfield（1887 — 1949）の若き頃の研究で，Palmer に大きな影響を与えたとされている[6]。この書の第 9 章は語学教育に関するもので，言語は，意識的な一連の規則の論理的言及の過程ではなく，“理解し・話し・書くこと”は，連合の過程であるとし，そのため語学教授は目標言語と意味・内容との連合習慣を学習者に構築させるものであるとしている。従って，文法・翻訳による教授法は，学習者の母国語がこの連合に介入することになるので方法論として価値の無いものであるとしている。また，外国語教授は，訓練を受けた教師によって行われるべきものとし，学習の入門期に不可欠な，正しい発音習得のための訓練は，学習者の母国語と目標言語との対照による音声の知識に基づいて，習慣付けられるまでの発音練習によってなされなければならないとし，音声記号は，その書き言葉が音声を表さない目標言語の場合には導入されなければならないとしている。文法については，文法知識が習得をより容易くする場合にのみ教えられるものであるとしている。彼は，“連合”構築，つまり習慣形成のためには，学習の初期より意味・内容の伴った目標言語による発話によって学習は行われなければならないと説いているのである。

1915年より，Jones の一連の講演を受け継ぐことになった Harold E. Palmer（1877 — 1949）は，direct method による Berlitz School[7] で英語を教え，その後1903年にベルギーで自らの語学学校を開いていた語学教師であった。IPA の会員になった1907年頃より Daniel Jones との交流が始まっていた。

1917年出版の Palmer の *The Scientific Study and Teaching of Languages* は，「近代語の学習と教授に関する要因と問題点の概観と，満足のゆく成果を得るための様々な方法論の分析」[8]と長い副題に示されているように，当時まだ一般の多くの語学教師が行っていた訳読中心の grammar–translation method の問題点を改革運動期よりの新しい言語観から指摘し，新教授法を説いたものである。この書で，彼は語学学習の目指すところは学習者の目標言語を母国語とする人たちが使う言語の習得であるとし，英語を外国語として自ら教えていた経験から得た言語分析を示し，独自の用語を使ってこれを解説し，さらにこの分析に基づいた新しい教授法を提唱している。

彼の言語分析では，語には形体と機能があり，形体は他の形体［語］と機能的な関係（ergonic）[9] を結び[10]一つの単位となり，これが文をつくりあげているとする。言語学習は，第一義

的材料（primary matter）となるergonicを先ず覚え，これを基に学習の次の段階で，第二義的なもの（secondary matter）である文を自ら作り上げていくことであるとする。学習者には子供の母国語習得過程にみられるような，受動的に目標言語材料が与えられ，これを貯える“潜伏期”が必要であるとしている。また，語学学習には真似て覚えることが不可欠で，口の動きが滑らかな習慣になるまで何度も繰り返し音を発して言って（catenizing）みなければならないとしている。このようにして覚えられたことが基本となり，続く学習において，学習者自身が言語内容を組み立て，引き出していくことになるのである。このように，語の形体と機能関係は意識活動によって学習されるものであるが，学習は半意識的理解力によってもなされるものであるので，学習は既修のものから未修のものへと細かい段階をおって組み立て（gradation）られなければならないとし，学習の初期に於いては，教師のジェスチャー，学習者の興味，意味・内容の論理性，翻訳による意識活動の中断の回避という四条件[11]が充たされなければならないとしている。

この書でPalmerが唱える方法論の背景に，少なくとも学習の初期の段階での，翻訳を排したmonolingual methodがあり，Berlitz Methodの教師としての経験が生かされている。また，彼は音声記号の学習を必要なものとしている点において改革運動の流れをくんでいるが，翻訳の完全な排除は，主張していない。学習の進んだ段階においては，意味の確認や間違った連想をさけるために，翻訳はしてもよいものとしている。Palmerのこのような言語観と語学学習・教授法論は，1922年に始まる約15年間の滞日中に，外国語としての英語教授の実践を重ねつつ発展し確立されていくのである。

以上のように，二十世紀初頭の約20年間の，改革運動の主張に基づく方法論に一貫しているところは，学習の初期には，言語本来の役割である，音声による伝達の手段としてのことば習得のために，書き言葉を避け，また，一連の音声とそれが示す意味・内容の直結を得させるために翻訳を避けて，母国語を使わないで指導するということであった。更に，この時期には，こういった指導法の科学的裏付けとしての新しい言語分析がされるようになったのである。

## 第2節：日本における英語教授法の研究

1901年に発令された「中学校令施行規則」によって初めて外国語を発音から導入する方針が明確に示され，続いて翌年定められた最初の中学校教授要目に付け加えられた“教授上の注意”では厳正な発音が強調された。これをはじめとして明治後期から大正前半期にかけての教授法改善の動きは，正しい発音の教授が唱えられたことにあった。またこの時期に，欧米の新教授法の紹介や，日本人自身による方法論の研究が始められていったのである。

1901年の岡倉由三郎（1863 — 1936）による『発音学講話』は，Sweet等の当時の欧米の学者達の研究を参考にしたもので，日本における科学的な発音学の始まりとみなされているものである。発声器官，音韻の分類と変化が日本語の音声を対象として講じられている[12]。

同年の『外国語教授法』（八杉貞利）は，Sweetの*The Practical Study of Languages*

（1899）に基づいたものである[13]。

同年，神田乃武[14]が英国留学中に知己を得たGouin（1892）の英訳者の一人であるHoward Swan[15]（滞日1901—1903）を英国より招いた。翌年の文部省夏期講習会の講師となったSwanが紹介したGouin Methodの音声面の指導に多くの関心がよせられた。しかし，一方ではこの方法論に反対を唱える意見もあり，高橋五郎（1856—1935）は「グアン式は愚案なり」とし，『最新英語教習法』（1903）でnatural methodやdirect methodは幼児教育法をそのまま生徒・学生教育法に転用し，母国語教育法を外国語教育法とした，子供の心理的発達を無視した教育法であると非難している[16]。

1902年発刊の片山寛（1877—1977）とMcKerrow（1872—1940，滞日1897—1900）による『英語発音学』は，日本で初めて音声記号が用いられて英語の発音を扱った出版物[17]で，音標表記はWebster式ではなくIPA記号が使われたものである。

1902年〜1905年，岡倉由三郎が語学教授法研究のためドイツ，イギリスに留学している。

1906年の『外国語最新教授法』は，ドイツの語学教育を調査した英国人Mary Brebnerの*The Method of Teaching Modern Languages in Germany*を留学より帰国直後の岡倉由三郎が抄訳[18]したもので，ヨーロッパの改革運動より生じた新教授法の紹介である。この書の付録として岡倉は「本邦の中等教育に於ける外国語の教授についての管見」と題する論文を書いている。内容は，留学中の見聞や学校授業参観，英語教師としての自分の経験や他の教師達の意見からまとめた，当時の日本における中等教育での外国語教授の状況を鑑みながら，日本での外国語教授のあるべき姿を述べたものである。従来の訳読法の反省に始まり，英語教授の，実際に役立つ運用力をつけさせるという実用的価値と同時に，学校での一教科として，外国の事物に関する知識と文化を得させるという教育的価値を説いている。このためには，外国語を“実地に口と耳に活用”して運用させる，発音から始めて文字に入る，英国を中心とした西洋の話を聞かせ外国語を知る楽しみと利益を説くこと等を述べている。「発音を正しくする」「対話を盛んにする」「文法を帰納的に教える」「なるべく外国の事物に親しませる」「読書力の養成を教授の主眼とする」ことが中等教育においての外国語の教え方の方針であるとしている[19]。彼のこのような考えは，Jespersen等当時の欧米での改革運動の流れを受けているものである[20]。

同年出版の岡倉の『英語発音学大綱』は，種本としてオランダの書があり，彼の独自のものではないが，Sweetに基づいた分析・解説がなされているものである[21]。

同1906年の12月，英語の教授法を研究する雑誌*English Teachers' Magazine*『英語教授』が創刊された。これは，日本における内外英語教師による最初の英語教育の専門雑誌である。第1巻（1号〜6号）[22]は広島高等師範のP. A. Smith（1876—1945，滞日1903—1945?）が編集主任で全号英語で書かれており，日本人教師も英文で論文を執筆している。第2巻からは東京高等師範のW. E. L. Sweet（生没年不詳，滞日1901—1922）が編集主任となり，日英両言語使用となっている。掲載されている論文のテーマは，一般的教授法論や教師論，発音学，教科書論，具体的・実践的な文法，英作，訳，会話の指導法等であり，内外の新刊書の紹介も載せられている。

1911年の『英語教育』は，外国語教授の改善を唱えて岡倉由三郎が色々な場で発表した考えがまとめられたものである。この書で彼は，上記の1906年の論文で述べた，中等教育での学科としての英語の教授は教育的価値と実用的価値を有するものでなければならない，という考えを発展させており，実用とは「既修の力を活用することに努力せしめ，其努力によって種々な方面に働き得る様にすること」[23] と定義し，英語の実用的価値は「英語を媒介として種々の知識感情を摂取することで･･･欧米の新鮮にして健全な思想の潮流を汲んで我国民の脳裏に灌ぎ二者相幇けて一種の活動素を養うことである」[24] と述べ，このために一週6，7時間をも割いて教えられているのであるとしている。学習の目標は，最終的には読書力の養成としているが，学習初期の発音の正確さや文法知識を重要なものとし，この習得のための詳しい指導法も述べられている。

1913年，Jespersen の *How to Teach a Foreign Language*[25] が前田太郎（1886 — 1921）によって『語学教授法新論』と題されて翻訳された。

同年4月，内外人英語教師による第1回英語教員大会が京都で3日間開催された。語学の授業に多くの時間と努力が注がれているのにそれほど効果があがっていないことから，内外人教師が共に協力して英語教授を討議し，英語教育の進歩を図るために "How Can the Cooperation of Foreign and Japanese Teachers Be Made Most Efficient for the Teaching of English in Middle Schools?" をテーマに開かれたのであった。この会の参加者に神田乃武，岡倉由三郎，嘉納治五郎（1860 — 1938）[26] 等もいた。翌年第2回大会が東京で開催され，「中学生に英語に興味をもたせる方法」について討論され，1916年には大阪で第3回大会が開かれ「英語教授が学生の徳性を進めるために有効である方法」が論じられた。これらの大会の関係記事や発表論文が『英語教授』に掲載されている[27]。

1915年に村田祐治（1864 — 1944）の『英文直読直解法』が出版された。村田は，英語で考え英文を正しく理解するまでの手段として訳解は必要であると考えていたが，逆戻りし日本語としておかしい表現になることが多い直訳を避けるために直読直解法を説いていた。和訳するのに終わりの方から訳さないで，英文の語順通りに句の区切り毎に順次訳してゆけば意味が簡明に理解できるという英文解釈法の主張である[28]。

1917年8月，雑誌『英語青年』（1898創刊）[29] 第37巻第9号に岡倉由三郎が早くも同年出版された Jones の *An English Pronouncing Dictionary*[30] の紹介記事を書いており，この書の出版は当時日本で唱えられていた "発音の正確さ" にとって「新たな刺激」であるとし，さらに，これに句の発音やイントネーションも記載されていたならいっそう良いと述べている[31]。

1919年頃より浦口文治（1872 — 1944）が直読直解法であるグループ式訳し方を提唱し始めている[32]。浦口は，英米人は英語を話す時いくつかの語句をまとめて発し，文を区切りながら意味を順次表現していると観て，英文を解釈する時に語句の区切り，つまり文中の語のグループ毎に意味を順次述べていけば良いと説いている。

1920年4月，神保格（1883 — 1965）が『英語青年』第43巻第1号に「Bloomfield 氏の言語学」と題した *An Introduction to the Study of Language*[33] の紹介記事[34]を書いている。神保は，国

語及び外国語教授には言語学の知識が必要であると述べ，この知識を得る参考書としてSweet等の書を挙げ批評・紹介し，その中でBloomfieldのものは最近の心理学的言語研究の成果を多く取り入れた点に特徴があるとしている。第2号より第44巻第11号までに翻訳が順次載せられている。

同年7月，『英語青年』第43巻第7号に岡倉由三郎が「英語発音記号に関する提議」を寄せ，IPA式音声記号をそのまま使うのは日本の英語学習者の実状に適さないとし，自らこれの一部に修正を加えた音声記号を示している。彼の提案する記号は，日本の学習者がアルファベット文字の発音との混同をしないように，また日本語の発音からの誤解を招かないようにしたものであり，さらにアクセント記号はこれを受ける母音の上に加える方が正確である[35]とする等の学習者にとって分かりやすく親切な提議である。

その他，この時期には『英学新報』(1901創刊—1903廃刊)，『中外英字新聞』(1894創刊—1923廃刊)，*Japan Mail*紙（1970創刊)，『英語世界』(1907創刊—1919廃刊)，『英語の日本』(1908創刊—1917廃刊)，『英語界』(1914創刊—1923廃刊）等に英語学習法・教授法論や英語学習・研究談が掲載された[36]。

明治後期から大正前半期にかけては，このように欧米の言語・語学教授の新しい研究が次々と日本に紹介され，発音指導を重要とする新教授法の普及が説かれたのと同時に，日本人教師自身による日本人学習者の実状に即する学習法・教授法が研究され，独特の方法論等も考え出されていった時期であった。このような背景の中に，1922年にPalmerの来日を迎えることになるのである。

## 第3節：神戸女学院における英語教育

明治後期から大正前半期（1901～1920）にかけて，神戸女学院では付表Bにあるように学科組織が度々改正されていった。これらの改正で特に高等科が順次充実されてゆき，これが専門部となり大学部に発展していったのである。

1902年の「神戸女学院規則」書の授業要旨によれば，英語は“文学を主とし読み方と共に会話，作文を熟練し，且訳解ができ，音読で意味を解し，原書を読めるようになることを，さらに，高等科においては，原書による学術・文学書が理解できるようになることを目標とする”とある。普通科における英語[37]の授業は，第一学年では第一学期，読本（週4時間，以下時間数のみ記載)，習字（2）があり，第二・三学期に会話（3）が加わり，読本二（4)，習字（1）となり，第四学期[38]には読本三に入り，第二学年第一学期にこれを終え，続く第二・三学期には読本四が教えられ，会話が小文典（3）に代った。第三学年第一・二学期に大文典（4)，作文（1)，第三学期には，大文典が英語学（3）になっている。第四学年では，3学期間通して英語（1)，作文（1）の週2時間の英語授業数になっている。第五学年では，名家著作（4）と作文（1）となっている。このカリキュラムから，入門期，初級の段階である第一・二学年で週8時間（第一学年第一学期のみ週6時間）の授業で基本的skillsをつけさせ，第三学年で系

統的に学ばせ，第四学年でこれの体系的な練習をし，最終学年で原書を読むように指導されていたことが察せられる。

高等科における英語授業の内容は，文科では第一学年第一・二学期名家著作（4），第三学期修辞学（4），第二学年，英文学（4）であり，第三学年では第一学期の大陸文学（4）だけであった。これに加えて，3学年通して選択科目として英文和訳（4）を履修することができた[39]。

1903年，高等科の学科組織が一部改正され文科・理科の別が廃止され，入学時に主要科目として設定された和漢学科・生物学科・理学科・歴史及び哲学科・英語学及び教育学科・数学科の6学科から専攻するものを選ぶことになった。

この年度の規則書によれば，普通科の英語授業は，第一学年第一学期，読本・会話（6），習字（2）と，入門期の授業数が8時間と増えている。第二・三学期，読本（4），会話（3），習字（1），第二学年第一・二学期，読本（4），会話（3），習字（1）となっており，第三学期には週8時間の授業数は変わらないが文典が加わっている。第三学年では第一学期，英語（3），文典（1），作文（1），第二・三学期，英語（1），文典（4），作文（1），第四学年では英学（3）となっており，第五学年では名家著作（5），作文（1）と英語授業のカリキュラムが多少変わり，第三学年第二学期以降従来より各学年で時間数が増え，全学年通して10時間多くなっている。

高等科での英語科目は，英語学及び教育学科の専攻生には第一学年第一学期に，文典，語学，第二・三学期に修辞学，語学，第二学年に英文学，第三学年第一・二学期に大陸文学，第三学期に教育学が講じられていた[40]。

1906年4月，学科組織が改正され5年制高等女学校に準じ，普通科への入学資格が高等小学校2ヵ年修了に改められた。この改正で，5年間の普通科の上に1年間の補習科が新設され，これを経て高等科に進学することになった。普通科の授業時数各学年週30時間のうち英語は6時間ずつとなり，第一，二学年で読解・会話（3），訳解（2），習字（1），第三・四学年では読解・会話（3，第四学生 2），訳解（1，第四学年 2），文法・作文（2），第五学年では訳解（1），通訳（1），英文学・作文（4）が教えられた。補習科では4時間の英語であったが高等女学校出身生にはこれに加えて更に4時間が課せられていた[41]。高等科では，各学年週4時間の英語授業で，第一学年第一学期には英文学，第二学期に文典と作文，第三学期・第二学年第一学期に修辞学，作文，英文学，第二・三学期に英文学，第三学年第一・二学期に英文学，第三学期に大陸文学が講じられた[42]。

1908年10月，補習科が廃止され，高等科が4年制となり，普通科に2年制の英語専修科が附設された。4年制となった高等科では，第一学年では全学生同じ教科を履修し，第二学年以降に専攻する主要科目[43]を選択することになった。英語科目は，第一学年では週6時間で英文学，文典，英国史が講じられ，第二学年以降では，英語以外の専攻生は，週2時間の随意科目として訳文（英文和訳・和文英訳）が履修できた。英語専修科では，各学年週12時間の英語の授業があり4年制高等女学校出身者の英語補習にあてられていた。

1909年10月，専門学校令による認可を得て，高等科を専門部と改称し，普通科を普通部と改称した。普通部の英語授業は，時間数と内容には変更がなく，専門部へは英語専修科卒業生と共に無試験で進学できた。専門部の英語授業は，第一学年，全学生共通の週6時間で英文学，文典，英国史が（1912年より訳文が加えられ）教えられた。英語専攻生へは，第二学年で英文学，文典，作文，修辞学，（1912年より会話が加えられ），第三学年で修辞学，作文，英文学，（1912年より会話が加えられ），第四学年で英文学と大陸文学が（1912年より会話，作文，書き取りが加えられ）講じられた。英語以外の科目の専攻生は週2時間の訳文を随意科目として選択できたのは従来どおりであった。また，他の数科目[44]が英語で講じられていた[45]。

1910年4月，後に新教授法を導入し普通部の英語教育の基礎を築き，専門部／大学部での英語教員養成の指導者となったMary Stowe女史（在職1910—1952）が就任し，英語発音を担当することになった。

1914年に勃発した第一次世界大戦中，神戸港が飛躍的に発展し在留外人の数が増し，神戸市の繁栄がめざましくなるとともに，聴解力と会話力が養成される神戸女学院の英語教育をめざして入学する者がますます多くなった。

1915年，タイプの授業が英語学習の助けとして導入された。

1917年，普通部が高等女学部と改称された。

1919年，学科組織が改正され，従来の専門部は，その第一年次の前に1学年をおいた2年間の予科と，上級の3ヵ年を本科とする大学部となった[46]。また，2ヵ年で普通部附設であった英語専修科は3ヵ年となり大学部附設のものとなった。従って，中等教育修了後予科2ヵ年または英語専修科3ヵ年を経て大学部本科へ進学することになった。4年制高等女学校修了者は英語専修科第一学年に，5年制高等女学校修了者は英語専修科第二学年か高等女学部修了者と共に予科に入学することができた。高等女学校出身者には英語の学力について入学検定があり，5年制高等女学校卒業者でも不合格の場合は，英語専修科第一学年の入学検定を受けることもできた。高等女学校高等科修了者は大学部本科へ入学できた。

当時の高等女学部での英語授業数と内容は，普通部時代のものを受け継ぎ，各学年週6時間で第一・二学年では解釈，会話，習字，第三・四・五学年では解釈，会話，文法が教えられた。英語専修科では，これも高等女学校出身者の英語学力を補習する従来の方針を受け継ぎ，英語科目は第一学年週13時間，第二学年週10時間，第三学年週8時間あり，聖書の授業も第三学年では英語で教えられた。予科では，英語科目は第一学年週6時間，第二学年週5時間で，その他週2時間の聖書も英語で教えられた[47]。

大学部本科は英文科だけとなり第一部と第二部に分かれ，第一部は英文学に必要な科目が正課のもので，第二部は教育に必要な科目がこれに加えられた英語教員養成コースであった。授業時数は，各学年，第一部，週21時間，第二部週25時間で，このうち週2時間の聖書，歴史，週6時間の英文学は，英語で講じられ，第二部では，第一学年週8時間，第二・三学年週7時間ずつの加設科目も英語で講じられた[48]。

この時代の学科組織改正に特徴的なのは，英語専修科の設置と英語教員養成の組織化であっ

た。英語専修科は，高等科／専門部／大学部への他の高等女学校からの入学者への英語の補習を中心としたものであった。これは普通科／普通部／高等女学部での英語授業数が週6時間で他の女学校の週3時間より多いことをはじめ，英語教育にちからが入れられていたことを示すものであろう。

1917年度の英語版の学習便覧によると，当時の高等女学部では，読解・会話の授業のテキストは，第一学年（3），第二・三学年（2）ではリーダーを使い，第四学年（2）で名家著作か Jones の「第Ⅳリーダー」と Montgomery の *Beginners' American History*，英文学の授業となる第五学年（4）では Lamb の *Tales from Shakespeare, Little Lord Fauntleroy* か Spyri の *Heidi* そして *Evangeline* または *Enoch Arden* や Rowland の *Practical English* が使われていた。訳解の授業のテキストは，第一学年〜第三学年（2）までは読解・会話の授業と同じものを使い，第四学年（2）で津田[49]の *English Stories*[50] か Kingsley の *Water-Babies*，Hawthorne の *Ten Twice-told Tales* または *Pushing to the Front*，第五学年（1）では *Ten Twice-told Tales/Pushing to the Front* の続きと Lord Avebury の *Life and Duty* が使われていた。文法・作文の授業では第二学年（1），第三学年（2）に南日[51]の“英文法シリーズ”，第四学年（2）には山田[52]の *A Complete English Grammar*[53] が用いられた。

一方，英語専修科[54]においては，高等女学部の第五学年に相当する第一学年では，読解の授業（4）に第Ⅲ・Ⅳリーダーの一部と Jones の「第Ⅳリーダー」が使用されており，これらは高等女学部の第二・三・四学年で使用のものであった。訳解の授業（3）では読解の授業と同じテキストと津田の *English Stories* が用いられており，これは先にみたように高等女学部では第四年次に使用のものである。文法の授業（3）では南日の“英文法シリーズ”が使われ，これは同じく第三学年で用いられていたものである。専門部第一学年に相当の第二学年では，高等女学部第四・五年次で使用の Montgomery の *Beginners' American History*，Lamb の *Tales from Shakespeare, Evangeline* が使われた。訳解の授業（3）では，やはり高等女学部第四・五年次で使用の *Pushing to the Front* や，Appleton の「第Ⅴリーダー」の一部，*Old Curiosity Shop*，興文社出版のものが使われた。文法の授業（3）では，*The Mother Tongue* とその他 Yonge の *Young Folks' History of England* を使って会話や作文も教えられていた。このように，他の高等女学校出身生には，本学院高等女学部での英語学習の内容を補習し，高等女学部出身者と共に専攻する専門部での英語の授業に備えさせなければならなかったのであった。

当時の英語教師[55]の数は，付表Cにあるように，1900年〜1920年にかけて5，6人から7，8，9，10人，そして11，12人とほぼ4，5年刻みで増え，1919年の総生徒数462人[56]に達する迄は，生徒数30人前後〜40人前後に英語教師1人の割合であった。

また，普通部の英語の授業では，はじめアメリカ人教師が文法を教え，日本人教師が訳解を教えていたが後に文法は，その学習の困難点を体験している者の方がよいという意見があったので，日本人が教えるようになり，読解，会話，英作文をアメリカ人が担当するようになった[57]。このことは，英語を母国語とするアメリカ人教師から英語を使って運用力養成の指導を受けるのであるから，一方で reading, listening-speaking, writing スキルの運用力を駆使し

つつこの4技能のcompetenceを養成していき，他方で同時に，日本語を母国語とする学習者の英語習得上の困難点を体験的に熟知した日本人教師の指導により文法を系統立てて学習し，このcompetenceを強化していったことになるので効果的な習得の要因であったと考えられる。

更に，Searle院長（在職1883—1929，院長在任1899—1915）は日本語を話さず，生徒との会話は英語でおこなっていたと伝えられており，またDeForest院長（在職1905—1950，院長在任1915—1940）も，日本語が堪能でありながらも，英語のわかる相手には決して日本語を使わず英語で話していたとのことで，これは語学教授の面からは，自然なcommunicative teachingと言えるので，望まれる情況であったわけである。

Mary Stowe女史は，普通部／高等女学部の英語教育に，その教授法としてphonetic/oral methodを導入し，一方この方法論を日本人，アメリカ人教師に指導していた[58]。これは，従来おこなわれていた音声面に優れた“女学院の英語”の教授法に，科学的に裏付けられた一貫した方法論が導入されはじめたことを示す。

大学部第二部の英語教員養成コースが設けられたことは，年来の高等科教育の意図の，組織的具体化であったと言える。高等科が設置されて以来，早くから，普通教育以上の教育を授けることになる高等科は，卒業後教育等に従事しようとする者のためのものとされ，高等科の学生が普通科の英語の授業の手伝いをしていた事実もあった[59]。また1887年の秋には，学期開始前に卒業生のために，教員養成のセミナーが開かれており，さらに，1913年の記録に最上級生が教育実習の体験をしたとの報告がある[60]。1919年設置の英語教員養成コースは，Mary Stowe女史の指導の下に，以後，更に充実され，1923年に，この大学部第二部の卒業生には中学校英語科教員無試験検定の資格が認められることになっていくのである。

注

1) Cf. 第1章第1節［『神戸女学院大学論集』Vol. 36 No. 2 pp. 75, 76 & 77（以下頁のみ記載）］
2) Cf. 第1章第1節 p. 76
3) Cf. 第1章第1節 pp. 76 & 77
4) Cf. 第1章第1節 p. 75
5) ear-training exercises, pp. Ⅲ-Ⅳ
6) Cf. Howatt（1984）p. 240, p. 265
7) Cf. 第1章第1節 p. 76
8) A Review of the Factors and Problems Connected with the Learning and Teaching of Modern Languages with an Analysis of the Various Methods which May be Adopted in Order to Attain Satisfactory Results
9) Palmerの造語
10) この考えはSweetの“言語要素と言語要素の連合”（cf. 第1章第1節 p. 77）に通じる。
11) Palmer（1917）p. 133
12) Cf.『英語教育史資料5』（1980）p. 172（以下『資料5』とする。）
13) Cf.『資料5』p. 77
14) Cf. 第1章第2節 p. 79, p. 81
15) Cf. 第1章第1節 p. 75
16) Cf.『資料5』p. 128

17) Cf.『資料５』p. 190
18) Cf.『資料５』p. 65
19) Cf. 岡倉由三郎『英語教育』(1937再版) p. 286
20) この論文の最後に外国語の教授法と発音学に関する“熟読の価値のあると思う書物”として Viëtor, Jespersen, Sweet, Passy 等の著書が挙げられている。
21) Cf.『資料５』p. 43
22) この年の12月号を第１巻第１号とし，翌1907年３月に第２号，６月に第３号，12月に第４号，1908年３月に第５号，６月に第６号が発行され，第２巻はこの年の12月号が第１号となっている。以後，12月，２月，４月，６月，10月の年５回発行が第９巻まで続き，第10巻は1916年12月号が第１号，1917年４月に第２号，６月に第３号，10月に第４号，そして12月号の第５号で廃刊になっている。
23) 再版本 p. 38
24) 再版本 p. 40
25) Cf. 本論 p. 106
26) 講道館，嘉納塾と共に，英語教授のための弘文館の創立者。
27)『英語教授』第７巻第４号(1914年６月)は第２回大会特集号になっており，これに1928年神戸女学院の大学部長となった，菱沼平治（1869—1937 在職1928—1934）の“What the Higher Schools Require of Middle Graduates”に関する意見が“Another View”と題して英文で掲載されている。当時広島高等師範学校の教授であり，米国留学より帰国後1913年から４年間文部省視学委員を兼任していた菱沼は多くの中学校の英語授業を参観し，発音やイントネーションが無視されて読解の授業が行われている状況を挙げ，この改善策として高等学校の入学試験に発音面を導入することや，中学第一学年を内外人で発音の特に優れた教師が担当すること，レコードの活用，各々の学校で英語授業のカリキュラムを作成すること等を述べている。(pp. 37 — 40)
28) Cf. 村田祐治「直読直解」『英語教授』Vol. Ⅷ. 1 . pp. 36 — 43
29) 創刊当時の題名は『青年』であった。
30) Cf. 本論 p. 107
31) p. 274
32) 書物としての出版は，『グループ メソッド』(1927)，『グループ式訳し方』(1928) がある。
33) Cf. 本論 p. 107
34) p. 16
35) pp. 206 & 207
36) Cf.『資料５』pp. 314 — 354
37) 1902年の学科表では「英学」と記されている。
38) 1896年より普通科第一学年は，四月が学年度始めになり，第一学年は従来の第三学期（翌年四月上旬〜六月下旬）を第四学期とした。
39) 理科専攻生は３学年通して英文和訳（週４時間）を選択として履修できた。
40) 英語科目の授業総数は週８時間と書かれているが内容別の時間数は記載されていない。
41) Cf. 1906—1907年度便覧（英語版）p. 7
42) Cf. 1906年度規則書，1906—1907年度便覧（英語版）
43) 国語・漢文，哲学，生物学，理化鑛物，英語
44) 修身，聖書，数学，論理学，心理学
45) Cf. 1909年度，1912年度規則書
46) Cf. DeForest (1950) p. 131
47) Cf. 1919年度規則書
48) Cf. 1919年度規則書
49) 津田梅子（1864 〜 1929）
50) *English Stories Selected for Japanese Students*（1901）であろう。

51）南日恒太郎（1871～1928）

52）山田時之助（1873～1920）

53）1908年齋藤権右衛門発行

54）この1917年度の英語版便覧に，英語専修科は専門部への補習だけでなく専門部の英語と一部重複するようにしてあり進学後英語専攻を3年で済ませられるようにしてあったと記されている（p. 19）。

55）当時は普通科／普通部と高等科／専門部での教師の所属の別が特になかったようである。

56）

| 生徒数 | | 普通科／普通部／高等女学部 | 高等科／専門部／大学部 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1899—1900 | 167 | 162 | 5 | | |
| 1904—1905 | 222 | 204 | 18 | | |
| | | | 予科 | 本科 | 音楽部 |
| 1909—1910 | 214 | 178 | 10 | 18 | 8 |
| 1914—1915 | 278 | 224 | 29 | 19 | 6 |
| 1919—1920 | 462 | 326 | 93 | 25 | 18 |

Cf. DeForest（1950）p. vii

57）Cf. DeForest（1950）p. 129

58）詳しくは次回第3章第3節に。

59）Cf. 第1章第3節 p. 84

60）Cf. DeForest（1950）pp. 130 & 131

**参考文献**


Bloomfield, Leonard (1914). *An Introduction to the Study of Language.* London: G. Bell and Sons, LTD.

DeForest, Charlotte B. (1950). *The History of Kobe College.* Kobe College［神戸女学院75年史］

福原麟太郎監修（1978).『ある英文教室の100年』大修館.

Hishinuma, H. (1914). "Another View" *The English Teachers' Magazine* Vol. VIII. 4.

Howatt, A. P. R. (1984). *A History of English Language Teaching.* Oxford: Oxford University Press.

Jespersen, Otto (1917). *How to Teach a Foreign Language.* London: George Allen & Urwinin, LTD.

神保　格（1920).「Bloomfield 氏言語学」『英語青年』（復刊）Vol. XLIII. 1. 研究社.

Jones, Daniel (1948). *An English Pronouncing Dictionary* : 9th edition. London: J. M. Dent & Sons, LTD.

———— (1918). *An Outline of English Phonetics*: 2nd edition.

片山　寛（1935).『我国に於ける英語教授法の沿革』研究社.

村田祐治（1914).「直読直解」『英語教授』Vol. VIII. 1.

日本の英学100年編集部（1968).『日本の英学100年明治編』研究社.

————————————.『日本の英学100年大正編』研究社.

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編（1980).『英語教育史資料』第3巻. 東京法令出版.

————————————.『英語教育史資料』第5巻. 東京法令出版.

大村喜吉・高梨健吉・井田好治復刻版監修（1985）. *The English Teachers' Magazine*『英語教授 復刻』別巻・解説編. Vol. I～Vol. X.

岡倉由三郎（再版1937).『英語教育』研究社.

———— (1917).「Jones 氏の英語発音辞典」『英語青年（復刻)』Vol. XXXVII. 9. 研究社.

———— (1920).「英語発音記号に関する提議」『英語青年（復刻)』Vol. XLIII. 7. 研究社.

Palmer, Harold E. (1917 再版1922). *The Scientific Study & Teaching of Languages.* London: George G. Harrap & Co. LTD.

高梨健吉他（1979).『英語教育問題の変遷』現代の英語教育１．研究社.
高梨健吉・大村喜吉（1975).『日本の英語教育史』大修館.

『創立五十年　神戸女学院史　明治八年　大正十四年』（神戸女学院　1925）
『神戸女学院八十年史』（神戸女学院　1955）
『神戸女学院百年史　総論』（神戸女学院　1976）
『神戸女学院百年史　各論』（神戸女学院　1981）
『めぐみ』第26号～第70号（神戸女学院同窓会　1901～1920）
「神戸女学院規則」（1902, 1903, 1907, 1908, 1911, 1912, 1917?, 1919?）
"Kobe College"〔英語版便覧〕(1906—1907, 1908—1909, 1912—1913, 1917—1918)

（原稿受理　1989年11月28日）

## 付表 A
## 英語教育史：年表　II（1901～1920）

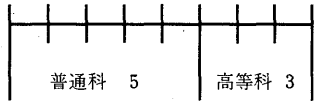
| 欧　米 | 日　本 | 神戸女学院 |
|---|---|---|
| 1901 | M34　『発音学講話』岡倉由三郎<br>『外国語教授法』八杉貞利<br>中学校令施行規則<br>Howard Swan英国より来日 | 1月　Keith[Mrs. Warren](～M37 12月)<br>4月　Searle院長 休暇帰米(～M35 9月)<br>9月　河合　謙(～T 3 6月) |
| 1902 | M35　『英語発音学』McKerrow & 片山　寛<br>（日本でIPA記号を初めて用いたもの）<br>（広島高等師範学校新設）<br>7月　Swan講演 Gouin Methodを紹介<br>（帝国教育会「英語調査部」成立） | |
| 1903　Palmer語学学校をVerviersに開校 | M36　『最新英語教習法』高橋五郎 | 4月　高等科の課程を一部改正（文科・理科の別を廃止）<br>学年度始めを全学年4月とする<br>9月　高根モト(～M42 6月) |
| 1904　*How to Teach a Foreign Language* (=*Sprogundervisning*, 1901), Jespersen | M37 | 6月　Goodman[Mrs. Ball](～M38 7月) |
| 1905 | M38 | 1月　DeForest(～M39 3月)(M40 4月～M44 10月)<br>(T 2 10月～T 9 1月)<br>(T10 8月～T 9 12月現在) |
| 1906　Daniel Jonesロンドン大学で開講 | M39　『外国語最新教授法』<br>Brebner著 岡倉由三郎訳<br>『英語発音学大綱』岡倉由三郎<br>12月　雑誌*English Teachers' Magazine*『英語教授』創刊<br>(T7廃刊) | 4月　学科組織改正[普通科への入学資格を高等小学校2カ年修了とし普通科5年の上に補習科新設 音楽科設置]<br>4月　Gordon[Mrs. Cowan](～M44 5月)<br>9月　長坂鑒次郎(～M44 4月)<br>Pettee(～M42 6月)<br>英語クラブ組織 |
| 1907 | M40 | 3月　普通科入学資格は尋常小学校6カ年修了となる。 |
| 1908 | M41 | 10月　学科組織改正[補習科廃止 普通科に英語専修科を附設。高等科を4年制とする]<br>4月　Donaldson[Mrs. Walker](～M44 6月)<br>片桐(津村) 敏(～M42 12月) |
| 1909　*The Pronunciation of English*, Jones | M42 | 10月　学科組織改正[高等科を専門部とし、認可される。普通科を普通部、音楽科を音楽部と改称]<br>9月　Cockroft(～M43 3月) |
| 1910 | M43 | 1月　Searle院長 休暇帰米(～M44 9月)<br>DeForest院長代理<br>4月　伊集院ヒデ(～T 4 6月)<br>Mary Stowe, Grace Stowe<br>(～T 4 6月)<br>(T 5 9月～T 9 12月現在) |
| 1911　(COD) | M44　『英語教育』岡倉由三郎<br>(『模範英和辞典』神田乃武他) | 9月　Kinkead(～T 1 12月) |
| 1912 | M45　(『詳解英和辞典』入江祝衛)<br>T 1　(『英文法研究』市河三喜) | 4月　今泉真幸(～T 8 3月) |
| 1913 | T 2　4月　第1回英語教員大会(京都)<br>『語学教授法新論』<br>Jespersen著　前田太郎訳 | 4月　Deyo[Mrs. Kiefer](～T 3 3月) |
| 1914　*An Introduction to the Study of Language*, Bloomfield | T 3　4月　第2回英語教員大会(東京) | 4月　Coe(～T 5 7月)<br>渡部(藍) 悦(～T 5 4月) |
| 1915 | T 4　(『熟語本位英和中辞典』<br>斎藤秀三郎)<br>(『井上英和辞典』井上十吉)<br>(『英文法辞典』入江祝衛)<br>『英文直読直解法』村田祐治 | 4月　一色(武) 鈴江(～T 6 3月)<br>實生　スギ(～T 5 7月)<br>9月　DeForest 院長就任<br>Cary(～T 5 7月)<br>Rupert(～T 9 7月)<br>三宅嘉策(～T 5 7月) |

| 欧　米 | 日　本 | 神戸女学院 |
|---|---|---|
| 1916 | T 5 4月　第3回英語教員大会（大阪） | 9月　山田(西田) コト(〜T 7 7月)<br>篠原助市(〜T 6 3月) |
| 1917 *The Scientific Study and Teaching of Languages*, Palmer<br>*An English Pronouncing Dictionary*, Jones | T 6 8月　岡倉由三郎 Jonesの英語発音辞典を紹介 | 2月　普通部を高等女学部と改称<br>4月　荘原　秀(〜T 9 12月現在)<br>7月　長谷場(鎌原) 政子(〜T 7 ?)<br>9月　奥居(藤井) いし(〜T 9 3月) |
| 1918 *An Outline of English Phonetics*, Jones | T 7 | 9月　Emanuel(〜T 8 3月)<br>岡部(鈴木) 節(〜T 8 7月) |
| 1919 | T 8　(『模範新英和大辞典』神田乃武他)<br>(『英語 発音と綴字』岩崎民平)<br>"グループ メソッド" 浦口文治 | 2月　学科組織改正[専門部を大学部と改称し予科2年本科3年を置く。英語専修科を大学部附設とし、3年制とする。]<br>4月　ゲンセン(〜T 8 7月)<br>飯塚恒太郎(〜T 9 12月現在)<br>9月　川崎市造(〜T 9 12月現在)<br>White[Mrs. Chamberlain](〜T 9 7月)<br>黒田　治(〜T 9 12月現在) |
| 1920 | T 9 4月　神保格 Bloomfieldの言語学を紹介<br>7月　岡倉由三郎「英語発音記号に関する提議」 | 1月　DeForest院長 休暇帰米(〜T10 8月)<br>4月　勝山(杉) 操(〜T 9 12月)<br>駒井(青野) 静江(〜T 9 12月現在)<br>9月　Burnett[Mrs. Tyler](〜T 9 12月現在)<br>Husted(〜T 9 12月現在)<br>MacCausland(〜T 9 12月現在) |

付表B

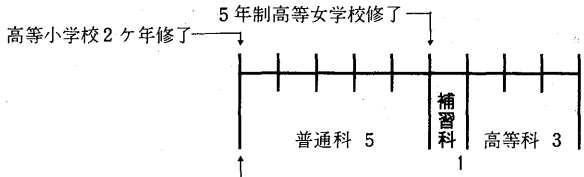
学科組織改正略図（音楽科を除く）　1901～1920（M34～T 9）　　太字：改正部分

1903　M36　4月



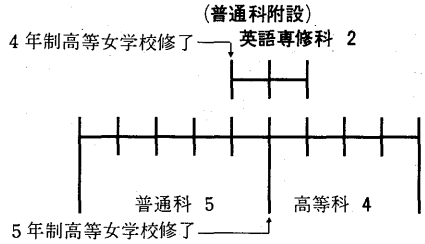

（文科・理科の別廃止）

1906　M39　4月

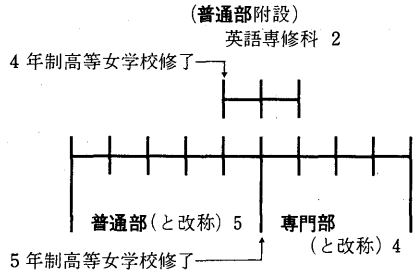



1908　M41　4月

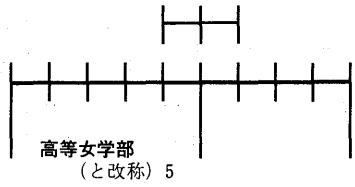
10月



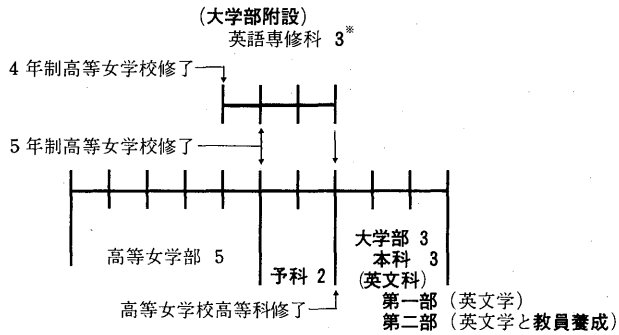

1909　M42　10月　認可




1917　T 6　2月




1919　T 8　2月




※ Cf. DeForest(1950) P.131

付表C

英語教師　1901～1920（M34～T 9）

（＊は同窓生）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | Searle | | |
| | | Chandler | | |
| | | Shaw（Mrs. Wheeler） | | |
| | | ＊西川（山家）悦 | | |
| | | Mr. Stanford | | |
| 1901 | M34 | Keith（Mrs. Warren） | （英語） | |
| | | ＊河合　謙 | （英訳） | |
| 1902 | M35 | | | |
| 1903 | M36 | 高根　モト | （英訳） | |
| 1904 | M37 | Goodman（Mrs. Ball） | （英語） | |
| 1905 | M38 | DeForest | （英語） | |
| 1906 | M39 | 長坂　鑒次郎 | （英訳） | |
| | | Gordon（Mrs. Cowan） | （英語） | |
| | | Pettee | （英語） | |
| 1907 | M40 | | | |
| 1908 | M41 | Donaldson（Mrs. Walker） | （英語） | |
| | | ＊片桐（津村）敏 | （英文学） | （嘱託） |
| 1909 | M42 | Cockroft | （英語） | （嘱託） |
| 1910 | M43 | M. Stowe | （英文学） | |
| | | G. Stowe | （英語） | |
| | | 伊集院　ヒデ | （英訳 英文典） | |
| 1911 | M44 | Kinkead | （英語） | |
| 1912 | M45／T 1 | 今泉　真幸 | （英訳） | （嘱託） |
| 1913 | T 2 | Deyo（Mrs. Kiefer） | （英語） | |
| 1914 | T 3 | Coe | （英語） | |
| | | ＊渡部　エツ | （英訳） | （嘱託） |
| 1915 | T 4 | Cary | （英語） | |
| | | Rupert | （英語 英文学） | |
| | | 實生　スギ | （英訳） | （嘱託） |
| | | 三宅　嘉策 | （英訳 英文典） | （嘱託） |
| | | ＊一色（武）鈴江 | （英訳） | |
| 1916 | T 5 | 篠原　助市 | （教授法） | （嘱託） |
| | | 山田（西田）コト | （英語） | |
| 1917 | T 6 | 荘原　秀 | （英語） | |
| | | ＊長谷場（鎌原）政子 | （英語） | |
| | | 奥居（藤井）いし | （英語） | |
| 1918 | T 7 | Emanuel | （英語） | （嘱託） |
| | | 岡部（鈴木）節 | （英語） | |
| 1919 | T 8 | White（Mrs. Chamberlain） | （英語） | |
| | | 飯塚　恒太郎 | （英語 英訳 英文法） | |
| | | 川崎　市造 | （英語） | |
| | | ＊黒田　治 | （英語 英訳 英文法） | |
| | | ゲンセン | （英語） | （嘱託） |
| 1920 | T 9 | Burnett（Mrs. Tyler） | （英文学） | |
| | | MacCausland | （英語 英文学） | |
| | | Husted | （英語） | |
| | | ＊勝山（杉）操 | （英語） | |
| | | ＊駒井（青野）静江 | （英語） | |